

朝鮮石人像を訪ねて（26）

深田 晃二

今年のむくげ合宿は「4月19日(金)18:00釜山アリランホテルロビー集合」と近年恒例の現地集合であった。北朝鮮のミサイル発射警戒期間中であったが、勿論何事も無かった。

往きの飛行機内で見た開城工業団地閉鎖の新聞記事には、4月17日現在205名の韓国人と1名の中国人が残留しているとのことであり、5月3日には1300万ドル(約13億円)の未収金と引き替えに最終残留の7人全員が韓国に返ったと報道された。報道されているように平均月給を150ドルとすれば、従業員数5万4千人の1.6ヶ月分の支払いに相当する額である。

北朝鮮は中国へ労働者を派遣し外貨を獲得しているが、5月9日朝日新聞では、開城工団を撤収した新義州や平壤などの労働者の新たな受け入れ増員を中国に要請したという。しかし中国は国連安保理の制裁決議を守る姿勢を示して難色を示した。併せて中国の銀行からの送金停止も実施されている。

2000年の金大中大統領訪問以来の南北協力の象徴であった金剛山観光が2008年7月に韓国女性旅行者射殺事件で中断し、今回は、雇用が伸びていた開城工団が米韓合同軍事演習への対抗措置として閉止された。貴重な外貨獲得手段であった開城工団の閉止に依る外貨収入減や中国などの経済的な締め付けは政策変更を促進するかも知れない。

☆ 首露王陵 ☆

一日早く釜山入りし、18日に金海市にある首露王陵を訪問した。釜山地下鉄と連絡した金海空港経由の軽電鉄LRTが通じておりアクセスが非常に良くなっている。



首露王は伽耶(駕洛:AC42-532)国の太祖で2千年前の王であり、朝鮮王朝時代(1392~1910)との陵墓制度の違いに興味を持って見た。

朝鮮半島での石人の始まりは、次項の掛陵などの作られた8世紀と見るのが妥当といわれている^①。文人・武人の風貌や、石獸を墓前に一列に配置す



る点などは、唐風にしてあるが、石が苔むしたり雨露で汚れておらず、石馬・石羊・石虎そのものの姿は朝鮮王陵のものと余り変わりがない。朝鮮王陵風を少しアレンジして最近作られた物のようであり石造物自体の歴史的価値はない。

首露王陵前には、伽耶後期の石造基石が移設されていることだが見落としてしまった。

王陵散策中に堀内氏・山根氏の友人と偶然に出会い「金海博物館は閉鎖中」の情報を得たので、博物館の代わりに首露王妃陵まで足を伸ばした。そこには石人や石獸は見あたらなかった。墓碑前の床石には立派な装飾の香炉石が設置してあった。

★ 慶州「掛陵」★

今回の合宿旅行主目的は400年前に作られた山城訪問で、機張や蔚山の山城を訪問する傍ら、要望して掛陵も訪問先に加えて貰った。

掛陵は新羅第38代の元聖王(785~798)の陵墓との説が有力だという。陵墓の前の広大な土地の左右に武人・文人・獅子が一列に配置してある。

石人像の顔立ちは中央アジアなどの西域風である。武人は腰に巾着風の袋を下げているので是非見ておくよう寺岡氏に言われていたので、しっかり写真を撮ってきた。



武人の持ち物は刀ではなく棍棒のようであり、片方の手は握り拳を固め胸に当てている。

文人は朝鮮期のものと違い笏を持っていない。また胸と背の両方に当てる打ち掛けのような両襷(りょうとう)をまとっている。両襷は武官の着用する服であるため、「文人(文官)」と見られているこれら新羅の石人は武官ではなかろうかとの意見もある^②。

獅子像四体はあたかも周囲を警戒している如く首をひねっているのがかわいい。

陵墓を取り囲む護石には十二支神像を刻んであることだが、時間がなくて石人像・獅子だけの見学となってしまった。



☆ 大阪府松原市三宅靈園 ☆

昨年 11 月 21 日に「大阪の石垣と石畳を訪ねて」というツアーに参加した。その時の講師の北川央氏(大阪城天守閣研究主幹)から石人像の情報を二つ頂いた。

5 月 17 日の良く晴れた日に、まず近鉄南大阪線「駒ヶ谷」で下車し、杜本(もりもと)神社を訪れた。自然石の盤面に獣面人身像を刻んだ隼人石は本殿前の左右に有ることが確認できたが、石人像は見つけることが出来なかった。

参道の石柱には「眞銅」や「金銅」の名字が多く刻んであった。読み方はごく一般的な名字と同じだろうが漢字はこの土地の特有の書き方であろうか。

もう一ヶ所は松原市の三宅靈園である。近鉄「河内松原」で下車し、北へ 40 分ほど歩くと大阪府立松原高校の南にある。途中神社があり、今度こそ見付かるように願掛けで行ったカイがあり、入口に有る2体を直ぐ見つけることが出来た。(N34.58870 E135.56167)

どちらも梁冠文人像で、高さは 134cm と同じである。口の両側の切り込みが長く、笑っているように見えるところも同じであり、本来一对のものと思われる。

広大な三宅靈園は墓参の人が耐えることなく、また、☆マークの付いた

戦没者の墓も沢山ある。駅前には3m程の高さの「松原村出征軍人・日露戦没紀念碑」があり 150 名の名前が刻まれている。遺族が心をこめてお参りするのは靖国ではなくこういう所であろう。

沿道の軒先には多くの燕の巣を見かけた。巣の下は糞が落ちてきたない。これが嫌われ、巣を作られないように防御する人もいるが、軒先に燕が出入りするのは良い風景ではある。

☆ 大阪府吹田市江坂 食道園 ☆

5 月 21 日に吹田市江坂に行く用事があったのでかねてより気になっていた江坂「食道園」を訪ねた。(N34.75798 E135.49885)

波形帽子(宦官)の2体で 25 年前の開店当時か



らあるという。宦官像では笏を持たない像もあるが、上の方が細い笏を持つものは珍しい。

又、足下に台座が付いているところも珍しいものである。高さ 99cm。

☆ 慶州文化財研究所・博物館 ☆

再び合宿旅行の話題を。4月 19 日は寺岡氏について慶州を旅した。釜山市内の釜田からムグンファ



号で仏国寺駅まで行き、徒歩で慶州文化財研究所・仏国寺・慶州博物館を見学するコースである。

慶州駅の一つ手

前の仏国寺駅はヨーロッパ風にプラットホームは低床で汽車の前後を自由に横断できる。いいムードである。

途中で「ナザレ園」のカタカナ看板をみながら文化財研究所迄は 10 分ほどで着く。人気が無く、トイレを借りて廊下の展示を見て、「さあ帰ろう」という矢先、「寺岡さん」と呼び止める声がした。当研究所の学術研究官・李柱憲氏である。会議の前で偶然にも我々に気づいたのである。寺岡氏によれば、李柱憲氏が伊丹廃寺を見に来られた時、奥さんの運転で案内したことがある、とのこと。立派な図録を頂戴した。首露王陵での出会いと言い、慶州文化財研究所での出会いと言い、むくげ会員の顔の広さに驚かされた。

20 分で行けると言われた仏国寺まで倍以上掛けて歩いた。韓国のような車社会では歩くことが無く、所要時間が判らなくなっているのであろうか。

仏国寺の入口では小学生達が砂埃を立てて遊んでいた。まるで遊園地だ。横の門から中にはいると多宝塔が優雅な姿でたたずんでいる。三重石塔の釈迦塔はガラス張りの囲いの中で解体修理中だった。室内には大型のクレーンが設置しており、屋根を 2 つ地べたに下ろしてあった。パーツの接合部には、上下がずれないようほぞ孔が穿ってある。

博物館まではタクシーで行きゆっくりと見学、仏国寺の多宝塔や釈迦塔のレプリカが屋外展示してあったが、ここで見た十二支像は掛陵の模造かも知れない。集合時刻に合わせて帰路を急いだ。

¹⁾高麗美術館 15 号 金巴望「朝鮮半島の石人(新羅編)」(1992.7.1)

²⁾高麗美術館 16 号 金巴望「朝鮮半島の石人(新羅編)二」

(1992.10.1)